

むかし、春のほのぼのとしたいいお天気の日、おじいさんが、畑に行きました。

かうちん、かうちんと畑をたがやしているうちに、腰こしが痛いたくなってきました。それでも、もうちよつとだけと思って、また、かうちん、かうちんとたがやしていました。すると、もつと腰が痛いたくなってしまいました。おじいさんは、よっこいしょと腰を下ろして、ひと休みしました。すると、むこうから、さるがやって来ました。

「おじいさん、たいへんですね」

おじいさんは、

「おう。きばつてたがやしてるんだが、腰が痛うてどうにもならん」とこたえました。さるは、

「おじいさん、おれがたがやしてやろうか」といいました。

「おお、そうか。おまえがたがやしてくれるなら、ありがたい」

「ああ、たがやしてあげよう」

さるはそういうと、くわをとつて、かうちん、かうちんとたがやしはじめました。おじいさんが、
「おまえ、じょうずにたがやすなあ」というと、さるは、顔もあげないで一生懸命けんめいたがやしました。畑のふちの草まで取つて、なにかも一生懸命はたらきました。おじいさんは、うれしくて、
「こりやあ、ありがたい。さるさんよ、おまえはほんまにいい子だなあ。うちには、お市いちつていうかわいらしい孫娘まこむすめがいるんだが、この畑をぜんぶたがやしてくれたら、あの娘をおまえの嫁よめにやるぞ」といいました。さるは、調子ちょうしに乗つて、きばつて、きばつて、おじいさんが一日かかつてもたがやせないような畑をみんなたがやしてしまいました。そして、

「おじいさん、いつお市を嫁にもらいに行こうか」とききました。おじいさんは、あんまりうれしかったので、つい、

「あさつての朝においで」といってしまいました。さるは、おおよろこびして、ぱあつと山へ帰って行きました。

おじいさんは、家に帰ろうと歩きだしました。けれども、

「お市はさるの嫁に行つてくれるだろうか」と思うと、心配しんぱいで心配で、だんだん足が重くなりました。日は西にかたむいてくるし、そろりそろりと歩いているうちに、日が暮くれてしまいました。家に着ついて、

「お市、もどったよ」というと、お市が、

「おじいさん、お帰りなさい」といって出むかえました。でも、どうもおじいさんのようすがおかしいので、

「おじいさん、何かあったんですか」とききました。

「じつは弱^{よわ}ったことになった。おまえにすまないことをしてしまったわい」

「いったいなにがあったんですか、教えてください」

「今日は、腰が痛くて畑はたがやせないし、休んでいたら、さるが来てなあ。畑をぜんぶたがやしてくれたらお市を嫁にやるといったところが、さるは、きばつてたがやしてくれた。おまえにはすまんことをいつてしまったと思うと、なかなか足が前に進まず、帰るのがおそくなった」すると、お市は、

「なんだ、そんなことを心配してるんですか。わたしはかまいませんよ」といって、おじいさんを元気づけました。そして、

「おじいさん、わたしは、さるの嫁に行くけれど、お願い^{ねが}があります」といいました。

「そりやなんだ」

「からっぽのたるを嫁入り道具^{どうぐ}に持たせてください。それから、三尺^{さんじやく}ある長いわらじを作ってください」

「それは、たやすいことだ」

つぎの日、おじいさんは、朝からトーントーンとわらを打って、長い長い三尺もあるわらじを作りました。

あくる朝、お市は早くから髪^{かみ}を結^ゆってたくして待^まっていました。そこへさるがやって来ました。

「お市を嫁にもらいに来ましたよ」

お市は、

「おさるさん、嫁入り道具のこのたるを持って行ってくださいな」といいました。さるが、たるをかつぐと、こんどは、おじいさんが作った長いわらじをそろえて出して、

「おさるさん、これをはいてくださいな」といいました。さるが、長い長い三尺もあるわらじをはくと、お市は、おじいさんに、

「では、行って来ます」といいました。おじいさんは、

「行^いっておいで」といって、見送りました。

さるは、先に立って、べつたらべつたら、歩いて行きました。お市は、ちょこちょこ、ちょこ、ついて行きました。そうして、だんだん山の中に入^いっていきました。やがて、谷川にや^やつて来ました。そこに一本橋がかかっています。さるは、

「お市、おまえ先にわたれ」といいました。お市は、

「いいえ。あんたが先にわたってください」といいました。そこで、さるが先にわたりました。

お市はすぐ後についてわたりました。

橋の真^まん中まで来たとき、お市は、さるの長いわらじのうしろをひよいと踏^ふみました。さるは足をとられて、とんぴんさんと、川へ落ちました。

さるは、どんぶりどんぶり流されました。さるが上になってたるが下になり、さるが下になってたるが上になりして、どんぶりどんぶり流れて行きました。お市は、そのようすがおかしくて、顔をかくして笑^{わら}ってしまいました。

さるは、上になったとき、お市を見て、悲^{かな}しくて泣^ないていると思いました。そこで、

「おれは死^しんでもいいけれど、お市の泣くのがかわいそう」といいながら、どんぶりどんぶり流されていったということです。

それだけ

村上郁再話

資料『季刊民話1』民話と文学の会